—あおぞら—

大気環境学会の財政状況について

副会長・財務担当理事
横浜国立大学　中井　里史

副会長および財務担当理事を仰せつかっている、横浜国大の中井です。今回、学会の財政状況について何か書いてほしいとの依頼がありました。これまで掲載されてきた「あおぞら」とは毛色が異なるかと思いますが、またどのくらいの方に興味を持っていただけるかわからないのですが、学会運営という観点からは必要不可欠な事項であることは間違いありませんので、最近の状況について整理してみたいと思います。学会関係者が最も関心を示さない分野かもしれませんが、会員の皆様で情報共有していただけると大変ありがたいと思っています。

令和 2 年度収支決算報告の貸借対照表に基づくと、現在の財政状況は、

資産	¥16,194,245
負債	¥8,943,249
正味財産	¥7,250,996

となっています。資産から負債を引いたものが正味財産となり、現在手持ちの財産と解釈するのですが、資産の約45% が正味財産となっています（言い換えると、負債が55% と半分を超えています）。不健全経営ではないと考えられますが、収入の多くを会費に頼ることになる学会という点からすると、学会活動を安定して行うためには自己資本率（正味財産／資産）を上げておく必要があると考えられます。

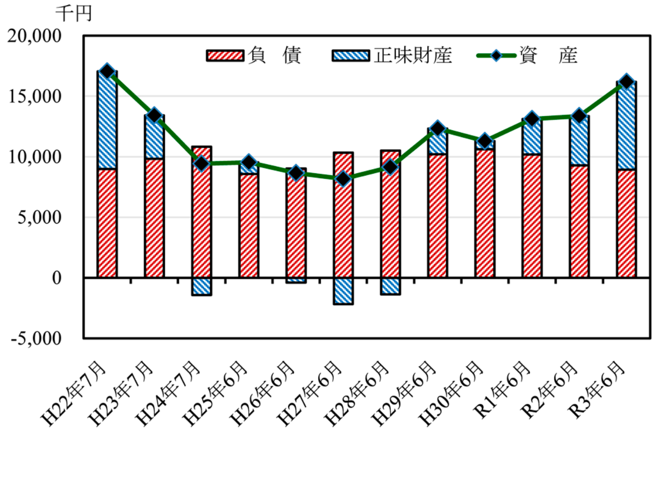
しかし、現時点のような状況になったのはつい最近であることはご存じでしょうか。また財政状況はどんどん悪くなってきているのでしょうか。いえ、ここ 10 年を考えるとまったくの逆です。やっと現在のような状況にまで回復してきたと言えます。

下図は、最近の貸借対照表の推移を表したものです。

ご覧いただければわかるように、令和 3 年 6 月の財政状況は、平成 22 年時点の状況とほぼ同じです。一方でその間の期間には、正味財産が負債と比較して大幅に少ない、あるいは正味財産がマイナスになっていた時期があることが見て取れます。正味財産がマイナスの時期は債務超過状態と考えられるため、下手をすると、いつ学会がつぶれてもおかしくない時期があったことになります。

ではなぜ、現在と同じような財政状況であった平成 22 年から、財政状況が悪化したのでしょうか。財政状況悪化の原因を必ずしも明確にできるわけではないのですが、現時点でも続いている会員数の減少とそれに伴う会費収入の減少、支出面では事務所の賃借料、定期的なものではないのですが必要な支出がこの間に続いて生じたこと、そして本来は学会活動の中心である学会誌印刷および発送費用などが負担となっていたと考えられます。

逆に、平成 29 年以降に財政状況が改善に向かった理由は、学会誌の電子ジャーナル化と事務局移転（国際文献社に業務委託）によるところが大きいと考えています。ただし、令和 2 年以降はコロナ禍が続いており、学会活動も、たとえば年会が対面で開催できないなど様々な制約があります。そのため、財政面の状況も通常とは異なってしまっており、必ずしも通常の場合の経年推移を正しく評価できていない可能性は否定できません。なお年会に関しては、年会実行委員会のご尽力もあり、収入と支出ともに減少しているのですが、収益はプラスとなっており、学会の財政状況に寄与していただいています。



一方、公益法人が守るべき財務基準として、以下の三つがあります。

1. 公益目的事業に係る収入が適正な費用を超えないと見込まれること（収支相償）。
2. 公益目的事業比率（費用ベース）が100分の50以上になると見込まれること。
3. 遊休財産額（具体的な使途の定まっていない財産の額）が年間の公益目的事業費を超えないと見込まれること。

2と3については従来から遵守できているのですが、1の収支相償（経常収益計≦経常費用計）については、本学会に限らないことではあるのですが令和2年度は守ることができませんでした。学会活動が停滞してしまったことで経常費用としての支出が学会全体的に減ってしまったことを表しているかと思います。コロナ禍の下では、単年度での評価はされないことになりましたので、今回守れなかったからどうのこうの、ということにはならないのですが、またお金だけが学会活動の指標ではないわけですが、収支相償なども考慮に入れた上で学会活動を活発にしていくことも必要です。ただいずれにせよ、現時点ではまだ事務局移転などに関しての移行期に相当するとともに、コロナ禍などの不確定要素もあることから、学会の財政状況を正しく把握するためには、いましばらく引き続いて状況を見ていく必要があります。

研究面からの社会貢献をよりよいものとするためにも財政面からも安定した学会運営を目指すことが必要であると考えます。大気環境学会を持続可能な団体として今後も組織充実させていくために、様々な形で、会員の皆様にはますますのご協力をお願いいたします。